

美しき黴



塩路隆子
句集

beautiful mold

朝日新聞社

B E A U T I F U L
M O L D

鬱
の
日
の
更
に
追
ひ
討
ち
金
魚
死
ぬ

天
心
の
月
に
懺
悔
を
強
ひ
ら
る
る

謀反などさらさら見せず吾亦紅

覚えなき打ち身の疵やけらつつき

来世には貞女とならむ白芙蓉

月更けて侏儒が似合ひの天狗茸

體
て
ふ
二
十
三
画
枯
兆
す

撥^{げん}
条^{まい}
の
玩
具
恋
し
き
秀
野
の
忌

スペイン五句

小鳥来るハレム名残のをんなの間

午後二時の酒場パ込み合へり冬帽子ル

ローマ世の遺跡に猫の日向ぼこ

巻き舌を真似て
有^グ難^ラう^シ冬ぬくし^ア
有^ス

昴
れ
ば
冷
気
俄
や
風
車
小
屋

西
鶴
の
女
と
逢
瀬
ぬ
く
め
酒

紅葉被し野宿も良けれ山頭火

口笛の通る淋しさ冬木立

捨てず着ず遠き記憶の
アノラック

白菜を剥がし親指姫探す

姥捨ての実感し
ばし枯野行く

マルクスを崇めし
日あり冬帽子

楯を焚く女に潜む狩ごころ

貴女にならばなせる話シクラメン

瞥女唄を恋ふれば吹雪く越の宿

揺さぶれど冬木はなべて失語症

ひよつこりと子が来さうな日おでん煮る

「箱根山」唄ひ雪中登山かな

益
荒
男
を
誇
る
家
系
や
狩
の
宿

芽
吹
く
と
き
男
の
ぬ
く
み
公
孫
樹

ふるさとの酒熱うせよ柳葉魚焼く

これからが自由時間よチューリップ

春愁や鳩の出さうな神父の衣

春眠や平衡感覚失はず

序破急を楽しんでゐる花吹雪

夜桜が門限無視を唆す

不器量なものへ愛着よもぎ餅

芥子の花揺れてアンニユイ募らせる

婦
唱
疲
れ
筍
飯
が
嘔
い
て
ゐ
る

洗
顔
の
水
な
め
ら
か
や
聖
五
月

古書市にダンテ神曲若葉冷

読本は「サイタサイタ」や葱坊主

合鍵を渡されし夢明易き

メロン切り祝辞妙案浮かびけり

これ以上省略無理の水着かな

襦ある紹の式服や桔梗紋

冷奴好きで根っから洋酒党

へらへらと青大将の二枚舌

絵日傘をくるくる離婚したと言ふ

あなどれぬ夏風邪三日粥が嘔く

絶唱とおぼしき夜半のほととぎす

祝宴に気の強さうな花氷

軽
快
に
働
く
臓
器
処
暑
の
風

雷
鳴
を
楯
に
女
の
独
り
愚
痴

絢欄の金魚白痴となる勿れ

青年の汗もあ膿、も美しき

万緑の貴方信じていいですか

恋の子がぼつり夜霧の甘さ言ふ

磊
落
な
男
逝
き
け
り
柘
榴
の
実

稲
妻
の
瞬
時
の
一
部
始
終
か
な

吾亦紅淋しがり屋で人好しで

饒舌へ椎の実ほどの不信感

搦々を出せぬ性なり鶏頭花

播り鉢を抑へし記憶とろろ汁

自己主張少し過ぎたる唐辛子

殊に濃き天誅村の葉鶏頭

神
前
に
払
ふ
古
道
の
草
風

引
き
算
の
ト
レ
ー
ニ
ン
グ
や
吊
し
柿

吾が町は余所者ばかり鳥渡る

大欠伸小春の海へ放ちけり

着膨れて昔鬪士のマルキスト

仏心になほ至らざり寒椿

き
さ
ら
ぎ
の
風
荒
々
と
反
戦
歌

雪
女
も
う
来
る
こ
ろ
か
風
変
は
る

カリンカを唄ひたくなる冬帽子

第二子は未だ米粒馬酔木咲く

漢一匹獣のごとく寒の灸

蝌蚪反乱行進曲を流さうか

鹿尾菜煮てさらりと貧を語りたる

春愁に即効ありしハーブテイー

黒点に生命ありけり
蛸蚪の紐

遠山の金さんが好き
花吹雪

豆飯を炊く一族の安定期

困を守る蜘蛛に問ひけり宇宙観

超能力欲しと思へり青葉木菟

楽天家らしき一族残り鴨

旅終へてまた旅プランさくらんぼ

時計草咲かせ駅長官舎かな

商談の船場言葉やアイステイ

蜘蛛の子の微塵の生命走り出す

今日どちら被らう夏の帽二つ

茹素麺一瞬にしているろは文字

日焼け止めたっぷり恋の子の遠出

臍のあるアンパンが好き敗戦忌

大まかに百と数へて目高飼ふ

西部劇めきぬ夜霧の駅に立ち

思ひ出に戦争ごっこ薄原

ワシコフの落とせし柘榴かもしれず

アルデンテ風の仕上がり走り蕎麦

田の神が緋の帯解けり曼珠沙華

野
の
花
や
海
女
に
洋
風
外
廁

丹
波
路
は
発
火
寸
前
照
紅
葉

ねんごろに磨くマイセン冬はじめ

黄落やドーベルマンの散歩道

木枯やゴリラに鬱を貰ひたる

ほきほきと何処の骨鳴る冬の朝

六感を信じて待てり雪をんな

母ゆづり丹波木綿のちゃんちゃんこ

狐火を追うて陰陽師の気分

凧や耶蘇名うすれし石の墓

いの席にひびく一の柝初芝居

田作りを褒めて長居の酒の客

半錠に頼る不眠や千鳥鳴き

寒林は後ろ姿の山頭火

割り勘と言ふ気安さのちやんこ鍋

風花を吸うて肺臓浄らかに

寒月やジャックナイフが見当らぬ

月の砂漠歌うて梅の夜なりけり

遊
牧
の
民
の
心
地
や
野
火
叩
き

越
え
ら
れ
ぬ
有
刺
鉄
線
猫
の
恋

主婦の枷外してひと日梅の宴

聖人の肋あらはや春の塵

燃え尽きぬもの胸中に荒野焼く

焼茄子に原爆以後の恐怖感

ベルギー・オランダ四句

機窓よりウラル雪溪食前酒

目に入むや運河に沿へる花菜径

風車聳つ
低^{ネー}い^{デル}
大^{ラン}陸^ド
大南風

はつ夏の跳ね橋濡らす通り雨

花
明
り
羽
ペ
ン
弾
む
誓
婚
書

パ
ン
ド
ラ
の
箱
を
開
け
ば
遊
蝶
花

B
面
に
入
り
た
る
生^た活^{つき}
豆
の
飯

本
音
で
は
生
き
ら
れ
ま
せ
ん
白
菖
蒲

一本の茄子を植ゑるに土を買ふ

母の日に犬のバリカン貰ひけり

名優を思ひ出せぬよ麦の秋

桐箱に黴の三冊母子手帳

尾根越ゆる夏蝶荒き翅遣ひ

和金とてボスの貫禄永らへば

機嫌よし今もレトロな扇風機

宇宙への散骨希望星涼し

梅雨晴に涙メイクのピエロかな

羅やさしたる嵩もなき胸乳

つきまとふ忍びの村の黒揚羽

シャワー終へ天あめ鈿の女うず命めとなりけり

腑分凶のここのあたりが暑に負けし

地の神と「はないちもんめ」牛蒡引く

亀石の睡魔櫟る猫じやらし

傾ぎたる鬼の雪隠赤のまま

野の花を活けて明日香の資料館

初鴨の着水湖を窪ませる

桃
啜る
嬰の
ほっ
ぺを
吸ふ
やう
に

天
窓の
ある
図
書館
や
小鳥
来る

蠮螋の斧の構やボデイビル

敗荷や三角法はもう解けず

山鳩の啼きて朝霧動き出す

三河郡紅葉村に遊びけり

東欧四ヶ国四句

ベルリンの壁陰々と秋の雨

国越えの免税手続き粉雪舞ふ

モルダウの流れやチエコの夕霧に

岩盤に聳つて王城や天高く

里
人
と
交
は
す
飲^{おん}
食^{じき}
花
神
樂

噓
し
て
り
ズ
ム
狂
へ
り
太
鼓
方

猛禽となりたる心地インバネス

林檎挽ぐ天の深きをまさぐりつ

癩癢を収める寝酒過ごしけり

日向ぼこペキネンシスの影作り

句集 美しき微うつく かわ

二〇〇四年九月一日発行

著 者——塩路隆子

発行所——朝日新聞社

〒一〇四―八〇―一 東京都中央区築地五―三―二

電話〇三―三五四五―〇一三一(代表)

編集——俳句朝日編集部

装丁・制作——バラレルヴィジョン

印刷——東京印書館

©Takako Shoji 2004 Printed in Japan